



Title	食の透視画法(12) : クレオールとしての文化と社会(下)
Author(s)	高井, 哲彦
Citation	しゃりばり(229), 46-47
Issue Date	2001-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52876
Type	column
File Information	charivari229_46.pdf



[Instructions for use](#)

食の透視画法⑫

クレオールとしての文化と社会(下)



高井哲彦 北海道大学大学院経済学研究科助教授
同大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター研究員

30年ぶりの N・Y地下鉄7番線

夕暮れのニューヨーク地下鉄7番線は、マンハッタン島を出ると、割れた窓ガラスの風景が並ぶクイーンズ地区の工場地帯に入る。乗客に白人ビジネスマンや観光客風は一人も見当たらず、耳に入るのは圧倒的なスペイン語と少数の中国語のみ。電車は終点まで行き止まりの単独線で、途中で乗り換える駅もない。枯草のような汗の匂いと厳しい視線の交錯の中で、扉の隅でジャンパールの襟を寄せながら、ここまで来た蛮勇を早くも後悔していた。

パリやロンドンの地下鉄でも、キナ臭い状況はある。鉄則は、車両に乗る前からホームで電車待ちする乗客層の分布を素早く色分けし、剃髪の若者集団や視線の不審な人物から距離を取り、インテリ・熟年層やカップル・家族連れが意識・無意識に集まっている安全区域にもぐり込むことだ。観光客が犯罪に会うのは、この暗黙のルールに無頓着に危険車両に乗り込んだ場合が多い。

が、このニューヨークの7番線では、そうした安全地帯を一切確保できなかつた。パリ、ロンドン、東ベ

ルリンはもちろん、カルカッタやマラッカまで各国の様々な移民街やラムを歩いたが、喉が渇くほど生命の危険を感じるのここがはじめてだ。殺人・強盗件数の市内統計もそれが単なる杞憂ではないことを裏付けている。

ヒッピー文化と学生紛争で揺れた1960年代末のニューヨーク、ほくはクイーンズ地区のフラッシングという新興住宅地で、0歳から5歳まで育つたという。いまのほくと同じ若さだった両親の世代は、ニューヨーク到着直後にもちろんマンハッタン島には住めず、郊外地下鉄の終点駅に、高層住宅によるユダヤ人街・日本人街を作ったのだろう。30年ぶりに再訪を思い立つと、おぼろげな記憶の中の「故郷」は一変していた。

かつてこの地区に住んでいた日本人でも、もはやここでは車の外には出られないと聞く。彼らが社会的地位を上げそこを巣立った後、今度はこちらに新参のプエルトリコ・中国移民たちに世代交代したらしい。

人の波に押されるように終着駅に降り立ち、右手をコココーラ・ライトを少しずつ飲むことで場をもたせながら、日の暮れかけた交差点で街

を見渡す。大通りには、スペイン語と中国語のネオンが林立し、男たちの一群が手持ち無沙汰に立ちつくしていた。もつと過去の痕跡も探したかったが、やはり他所者は陽光が消えぬうちに立ち去らなければなるまい。

フラッシング駅から発車直前、大声の掛け声と乱暴な足音がしたと思うと、180cmを越える大男と裂けたデニムジャンパールの女性が大荷物を抱えて掛け込んできた。乳母車だった。黒い髪と褐色の肌の赤ん坊が笑い声をあげると、暗く灰色の車内の張りつめた空気がはじめて緩んだ気がした。たしかにそうだ。一時来訪の異邦人には危険きわまりなく見える街も、地域住民には家族とともに毎日の生活を育む場所に他ならぬ。いまの自分とほぼ同年齢の若夫婦の姿に、30年前にこの地でほくを育てたという自分の両親を見たような気がした。

歴史には不可逆な循環がある。ほくが乳幼期を過ごした揺り籠の街は、一世代が循環したいま、プエルトリコの男の子に譲り渡された。この赤ん坊は、スペイン語なまりの英語を話すアメリカ人として育ち、この街に住み続けるのだろうか。それ

ともまた、この街を離れて成人してから再びここを訪れ、さらに世代交代した新移民の子供に出会ったりするのだろうか。30年前は同じところにいたのかもしれない座席の反対側から、一面識もない赤子の真つ黒な瞳を見つめて、この坊やの前途の多幸を心から祈った。

「グローカル」世界の ダイナミズム

17世紀に欧米列強がカリブ海等に植民したとき、奴隷らの第1世代は欧米語を受け入れ意思疎通のため、ジン語に単純化し、第2世代はそれを独自体系のクレオール語に仕立て直した。移民の世代循環が生んだクレオール文化は、優越した宗主国文化が植民地文化を影響支配する優劣関係を出発点に持ちながら、後者から前者に対して独自のものが生まれ、逆転現象が注目される。異文化が出会ったときの力学関係と社会自身が(劣位の文化ですら)持っているこの再生の力は、21世紀のグローバルイノベーションを考えると、きにも示唆的である。

国際流通、大衆消費市場、多国籍企業などに象徴される世界経済は、各地域の経済社会に影響を及ぼし制

度や文化まで変えつつあるが、それが地域的な活性を失わせることには必ずしもならない。

たとえば日本の食生活を例に取れば、カレーライスやラーメン、マクドナルド・ハンバーガーは日常生活に定着し、朝のトーストとコーヒールがご飯と味噌汁に代替するようになったが、それをもって食生活全体が無国籍化しつつあるとは言えない。各国エスニック料理が食べられるようになったことは、たしかに日本人の味覚の幅を広げたが、それはこれまでの食体系の拡大であってこそあれ、代替や駆逐ではない。それは日本人が漢字を基盤に現在の日本語を一種のクレオール語として自己形成したことに似ている。食生活は、従来からの習慣と記憶を基軸にしてこそ、外部のものを選択的に取り入れ成長し続けてきたのだ。

クレオール語が象徴する再構成の力は、言語・料理などの文化面のみならず、社会経済を考えると、興味深い。日本経済に特有な系列やメインバンクシステム、フランス経済独特の旧公企業群や国家介入の形態など、どの国の経済も、固有の歴史的経緯に依存する制度組織や文化習慣と密接不可分である。

もちろん各国経済の相互依存は増えていくはずであるし、その前提となる対外ルールと対内制度は透明度を増していかなくてはならない。しかし統一的な市場原理と同時に、各国の経済システムは独自の制度・習慣を再編保持することで機能し、逆に多国籍企業はローカル化することで共存している。

グローバルイズムは、無限定のポードレス状態を意味するのではない。世界中の経済・社会・文化が混ざり合い、ひとつに完結するようなことはありえない。「人種のるつぼ」と夢想された移民国家アメリカですら、混血化はさほど進行せず、各民族が独自性を保ったまま共存する「人種のサラダボール」であることが明らかになっている。いくら相互影響や統合が進んでも、国家や地域というローカルな単位の役割は消えるものでない。

またグローバルイズムは、全方位に均質に進行するものでもない。ローカルな単位同士の相互関係にも、濃い結びつきから淡い関係まで同心円状のグラデーションがあるからだ。仮にたとえ日本が移民流入を完全自由化したとしても、日本に世界中から均等に外国人が集まることにはな

るまい。日本が中国や韓国やアメリカなどと持つパイプは、ウクライナやナイジェリアやマダガスカルよりはるかに太い。

グローバル化は、特定の歴史的関係の濃淡や経済的パイプの太細に大きく依存し、ローカル圏——それは地理圏とは限らず文化圏や経済圏かもしれないが——ごとの特性を帯びざるをえない。グローバルイズムはローカルイズムとの結合なしに存在しえぬからこそ、「グローバルイズム」の将来像が注目されるのである。

多くのイメージする「グローカル」世界は、無数の源泉から吹き上がる小さな波紋が、「オリンピックの五輪」のような形で重なり合い共鳴する広い湖面である。大きな波紋もあり小さな輪もあり、隣り合ったものも遠いものもあるが、各波紋が中心から外に広がる力を持ち、他の同心円と混じりあうことで新しい形を作る。

ローカル社会が歴史的に形成された文化を保ちながら、開かれたネットワークで周囲と連動し、相互影響の中で自己更新していくダイナミズム。それこそ、波立つ湖面の下に我々が透視する未来像である。